OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	19世紀英国におけるインドのテキスタイル見本帳 ：「産業博物館」の視点から
Author(s)	平光, 睦子
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75340
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

19世紀英国におけるインドのテキスタイル見本帳
―「産業博物館」の視点から

平光　睦子　同志社女子大学

はじめに

1866年，テキスタイル見本帳，『インドのテキスタイル製品』（*The Textile Manufactures of India*, 以下見本帳）が英国のインド・オフィスから発刊された。制作者のジョン・フォブス・ワトソン（John Forbes Watson, 1827–1892）は，インド博物館の館長を務めた人物で，同年，見本帳の解説書として『インドのテキスタイル製品と人々の服装』（*The textile manufactures and the costumes of the people of India*, 以下解説書）を発表した。そのなかで，彼は見本帳の目的は英国製品の輸出先としてのインドのテキスタイル市場の調査と分析にあると述べ，見本帳を「産業博物館（Industrial Museum）」と呼んでいる。本発表では，この「産業博物館」という視点から見本帳に託されたワトソンの意図を明らかにしたい。

見本帳『インドのテキスタイル製品』

見本帳は700点のテキスタイルサンプルを収めた全18巻から構成される。サンプルの多くは1855年のパリ万国博覧会インド部門に出品されたもので，制作された20セットは英国とインドの染織産地に配布されたという。

各巻はおおよそ大分類に従って編集されている。その大分類は当時の万国博覧会等における系統だった分類とは異なり，分類項目には，ターバン，男性用衣類，子供服，ハンカチーフなどの用途による項目から，木綿，絹などの素材による項目，モスリン，チンツなどの布の種類による項目などまで入り混じっている。また，サンプルの産地は，当時の英領インドの領土に，チベット，ウズベキスタン，アフガニスタン，イランを加えた範囲に広がっている。

解説書『インドのテキスタイル製品と人々の服装』とワトソンの視点

解説書のおもな内容は，各サンプルの基本情報と，インドの人々の服装に関する情報，そしてテキスタイルの製造に関するより詳しい情報である。

インドの人々の服装に関する情報の中心は，インドの代表的な衣服，ターバン，ロンギー，ドーティー，サリーなどである。それらに関しては機能性や着付けについて，スカーフやショールに関しては着用する季節や場面について，また，それらが洋服といかに組み合わせて着られているかなどについて述べられ，さらに，着付けや組み合わせがテキスタイルの具体的なデザインにどのように関連するかが指摘されている。テキスタイルの製造方法に関して，例えばダッカ・モスリンの内容を見ると，機械製モスリンと手仕事によるダッカ・モスリンの比較実験結果のほか，ダッカ特有の風土や製造工程が図版を交えて詳しく説明されており，微に入り細をうがつ説明は各種道具類や職人の身体つきにまで及ぶ。

見本帳を制作したワトソンは，1858年にインド製品のレポーターおよびインド博物館館長に任命されてインド製品に関わることになったが，インド製品の専門家としての活動が顕著になるのは見本帳を制作した頃からで，それ以前はおもに繊維植物や輸出向け農作物の栽培や加工に関する調査

に従事していた。当時の彼の報告に目を通すと，天候や土壌，農作物だけでなく，労働者たちの所作や身体の特徴にまで言及しており，生産物を身体的な営みと結びつける視点は解説書の説明に通じるものがある。

「産業博物館」の構想

ワトソンは解説書のなかで，「産業博物館」と「貿易博物館（Trade Museum）」という二つの名を見本帳に与えている。

さらに近年になって，「可動式博物館（Mobile Museum）」という呼び名が新たに加えられた。F・ドライバーとS・アシュモアは，「可動式博物館　ヴィクトリア期英国におけるインド・テキスタイルの収集と普及」[1]と題した見本帳に関する論考を発表し，そのなかで，多くのサンプルを小さなサイズに収めたその形状に見本帳とオーウェン・ジョーンズの『装飾の文法』（1856年）の共通点を見出している。他にもいくつかの共通点は認められるが，しかし，両者の基本的な姿勢は大きく異なっている。『装飾の文法』には，世界各国の装飾模様から見出された普遍的なデザイン原理，「37項目の提言」のほか，インドの見本生地を元にまとめた，あらゆる織物に適応されるべき5項目の一般法則が提示されている。「37項目の提言」と同様に，これら5項目の法則に見られる，多くの見本から一般的な法則を見出す姿勢は，抽象化，普遍化の作業であり，ワトソンが見本帳や解説書でみせた，製造現場に分け入ろうとするかのような，具体化，実態化の作業とは逆方向の姿勢といえるだろう。

見本帳の目的はインドのテキスタイル市場の調査と分析だとワトソン自身は明言しており，この目的のもと見本帳にはいくつかの活用方法が想定されていた。

一つは，サンプルをもとに生地を再生産することである。そのために小さなサンプルから生地全体の特徴がわかるように工夫をした，とワトソンは述べている。そして，この方法で製造に直接的に役立てることを想定し「産業博物館」という呼び名を与えたと考えられる。

もう一つは，英国とインドを含めた広い範囲のテキスタイル産業の中で，製造業や仲介業，小売業らの間の取引の中で製品カタログのように機能することであり，この目的が「貿易博物館」という名に託されたと考えられる。「貿易博物館」という構想は，のちにインド博物館を巻き込んだより大きな構想へと発展し，ワトソンは1875年にインド博物館を貿易博物館として特化する方針を打ち出す。

おわりに

ワトソンの見本帳は，手仕事を機械で模倣して生産，製造するための「産業博物館」として捉えることができる。そして，この「産業博物館」はより広い範囲の産業界を巻き込んだ「貿易博物館」の構想にも連動していた。彼は見本帳だけでなくインド博物館をも「貿易博物館」ともいうべき性質の博物館にしたかったようだが，インド博物館は1879年には閉鎖され，この壮大な構想が実現することはなかった。

註

1　Felix Driver, Sonia Ashmore “The Mobile Museum: Collecting and Circulating Indian Textiles in Victorian Britain”, *Victorian Studies* Vol. 52, No. 3, Indiana University Press, 2010, pp. 353–385